

味 爽 抄

ハイデルベルヒ漫歩

杜 子 夜

1
小雨が降つてゐる。

窓から見下すとネッカー河には薄霧が流れて、昨宵食堂から眺めた華やかな灯の街は、朝の雨に、すつかりおちついた濡色に面がはりしてゐる。宿の庭にすく／＼と立つヒマラヤ杉の梢越しに、やゝ低くハイデルベルヒの古城が、栗色のどつしりした姿を、森から抜け出すやうに腰から上をあらはしてゐる。山頂近くに漂つてゐた雨雲も次第にうすれて、どこか明るい光が上空に漲つて來た。ちぎに晴れるだらうと思つて、悠くりかまへて朝食

をとつた。

宿を出る頃は薄い陽ざしが城樓や尖塔を染めて、森の翠も雨後のすが／＼しさに生氣を取り戻したやうに見える。

驛へ車を驅つて荷物を託してから、町をぶらつく。西南獨逸に位して、古くから大學町として知られたこの都市は、山紫水明の言葉をそのままに具現した、物靜かな町であつた。雨の名残りの濡れた舗道を歩きながら、どうかすると日本の都會のどこかを散歩してゐるやうな氣になつてゐた。横文字の新刊書の並んだ本屋の店頭でも、時計寶石商の飾窓でも、とりたてゝ異國情調を

嗟かすやうな事はなく、なごやかな心もちで、ぶら／＼と目貫の通りを歩いて行つた。

雲は次第に散つて、濃碧の空からは快適な陽光が、街いつぱいに灑ぎかけてゐた。道は驛から城の方へ引返すやうな方角になつて、ネッカーの川添ひ路は、今歩いてゐる大通の左手に當つて平行に走つてゐるらしく、所々の小路から見通しに、川向ふの翠微の丘が眺められた。

2

ある廣場に來た時、その片隅でベデカを聞いて、「赤牛」の所在を確かめるために、鳩首して相談を始めた。

「赤牛」とは、大學生が華客となつて寄りつくつと云ふ有名な酒場である。たゞ好奇心から一寸覗いて見ようと云ふ寸法であつた。この物々しい異國者の立話の體を、通りすがりの一夫人が目ざとく見つけたやうであつた。五六歩行きすぎたから、小戻りして

「あなた方、何を探していらつしやるの」と、いかにも親しみある調子であつた。

「赤牛は何處でせうか」

と答へ且聞いた。すると此方の心もちをすつかり了解したやうに、「赤牛」を初めこの町の名所遍歴者が、探訪すべき場所を何くれと丁寧に教へてくれた。そこで、われ／＼は昨日古城を訪ねてから「城の宿」に泊り、今朝は「赤牛」を覗いてから、川向ふの舊蹟を探らうと豫定してゐる旨を述べて、その好意を謝した。

「さう、さう、それはよござんすね。では、よい旅をなさいまし」

と、夫人は小首を心持傾けて微笑しながら、靜かに歩み去つた。黒地に小い小紋のある服を着た、氣高い感じのする四十恰好の人であつた。

酒場「赤牛」は、想像とはかなり驅けはなれた風情の家であつた。午前中とて、店は別に客らしい姿も見えずがらんとしてゐた。何の變哲もないありふれた酒場にすぎない。夜分でないとその本領を發揮し得ないかもしれぬが、「豊國・江知勝の類か」と、本郷界隈に於ける學生々活の昔を喚び起して誰やらが慨然として云つたが、

全くその通りであつた。

3

町角から河岸へ出た。そこでアカシアの樹蔭のベンチに腰を下して、一憩してから河べりを上へと歩いて行つた。カルルス・トールの傍の川堰のある橋の袂で、欄干に凭りかゝりながら、船の往來や岸の翠色を眺めつゝ、寫真好きの男がそこゝを撮影して遅れがちなのを、待ち合せてゐた。

すると、橋際の家の戸口に立つてゐた男が寄つて來て、にや／＼笑ひながら

「わしは日本にゐた事がある」と話しかけた。

「どこにゐた」と聞き返すと

「方々にゐた」とて、横濱神戸と港々の名を口にした。

水夫あがりらしい六十がらみの男である。

「船乗か」と聞くと「さうだ。お前は日本のどこだ」と問ひ返す。「廣島」と答へると、鸚鵡返しに「廣島」と叫ぶやうに云つたかと思ふと、口速に「よく知つてる。廣

マイアムベルと漫歩

島は。それから宮島、似島……」と続けざまに云つた。

似島と聞いた私には、或る事實が突差に閃めいた。それで、「いつ頃日本にゐたのか」と訊すと、「二十年ばかり前になるかなあ」とやゝ言葉を濁した。それから暫く、もとほらぬ舌で探り入れた我れ一語、彼れ一語の言葉の間から、私はかう判断した。彼は世界大戦の頃、東洋方面の港にゐた處、青島の要塞に召集され、その結果俘虜となつて、廣島沖の似島收容所で暫く暮してゐたものらしい。しかし、青島の戦争に参加したかと鎌をかけて見たが、囚はれの身を恥ぢたのか、決してさうは言はなかつた。けれど最初、彼が不用意に發した似島の一語は、私のこの想像を容易に消磨させなかつた。

——大正七八年の交、似島に居た獨逸俘虜は、毎日のやうに廣島師團の練兵場附近で、雑役の勞働に従事させられてゐた、その往き歸り、大手町通りを軍歌を唱ひながら歩いて行つた。あの町並には旅館が多い。その女中たちが赤い腰巻を出しながら、玄關口の雜巾掛をしてゐる光景を見て、俘虜が騒ぎ立てると、女中の方でもわ

ざと妙な仕科しこをして笑はせると云ふ記事を、當時の新聞は面白半分に報道してゐた。又ある時は、高等師範へ來て音楽會を開いたり、附屬中學の生徒と蹴球の試合をしたりなどした。——ネッカーの橋に凭りかゝつて、この老夫夫を前にしながら、そんな事を私は思ひ出してゐた。

われ／＼の立話を、傍で聞いてゐた彼のおかみさんは、急にその横太りした偉大なる體を、家の方へ運んだかと思ふと、大形のアルバムを抱へて再びあらはれた。さうして折からの陽さしに、夜來の雨の濕りの、すつかり乾いた橋の欄干の上にそれを載せて、はたりと開いた。二三枚あちこち捲つて「あなた」と指し示したのを見ると、——神戸湊川神社、有馬温泉、福原廓、また嚴島の大鳥居、紅葉谷、泉邸、その他、安つばい色刷の菊人形、藝妓手踊など、ありふれた日本名所風俗の幾葉かの繪が書き寫真が、二三頁の間にこた／＼と貼りつけてあつた。彼は猶、日本に於ける思出を、空に描くやうな眼ざしで熱心に語つた。太つたおかみさんは、遠い／＼異國を

語る亭主の顔を、うれしさうに見守つてゐた。

「もう一度、行く氣はないか」と云へば、彼はすぐ「いや、年をとつた」と手で制したが、聲を一段と落して「それに金もない」と附けたした。面白さうに笑ふおかみの顔を、彼は真面目な表情で見返したが、眼を轉じて余の顔を見た時、彼の眼に浮んだ隠しきれぬ一抹の寂しさを、見逃す事が出来なかつた。

こゝで、ヒルシュ・ガッセの所在しよを聞き訊して、握手して別れた。橋を渡り切つてふり返ると、老夫婦は頻りに手を振つてゐた。

4

ヒルシュ・ガッセを辭し去らうとすると、いつの間にか曇つて、大粒の雨がぼつり／＼と落ちて來た。と思ふまもなく、沛然として篠突くばかりに大地に叩きつけた。出でかねて、入口の部屋に腰を下し、時間を待つた。たゞさへ薄暗い室は、一層陰翳の影に包まれて、空に迫る植込の葉色さへ、明るさを取り逃がした様に見えた。

私はこの家の階上で見た決闘場としての設備や、立て並らべた武器調度の類を心のうちに思ひ返した。古ぼけた形状そのものが、床や壁に滲む血痕のどす黒さと共に、既に遠い過去の影しか宿してゐない事を、認めずにはゐられなかつた。決闘と云ふ大學生の風習さへ、年々に衰へて行くと云ふ事實も首肯される。古机に刻み込んだ多くの人の署名の中に、ピスマークの名を發見する事は、たとへそれが偽作でないにしろ、果敢ない昔の夢の名残でしか有り得ないのである。彼が麥酒ビールの滿を引き決闘に血を流した事と、大宰相の印紋を帯びた後年とに、どれだけの因果關係を要求してよいものだらうか。剛快と粗暴との微妙な二筋道が、後の日の成否に絡む奇しき宿命を思ふ時、人生の姿の摩訶不思議に、探つたい感なしにはゐられない。

夕立は去つた。庭前の大きな椽の葉からは、名残りの露がぼたり／＼とこぼれてゐた。

5

坂道を引き返して、川添ひの通りに出る。右にとつて一町ばかり川下に行くと、右側に葡萄棚のあるレストランがあつた。シエツフェル・テラツセは此所で、かの戯曲「アルト・ハイデルベルヒ」の女主人公にゆかりある家と聞いた。

この戯曲は、一九一〇年、マイヤア・フェルステルの作である。

ザクセンのカールスブルグ公園の公子カール・ハインリッヒは、家庭教師ドクター・ユットナーに伴はれてハイデルベルヒの大學に入つた。南獨逸の秀麗な山光水色と學生生活の明朗快適とは、これまで因襲に囚はれ沈滞に蹶んだ陰鬱な王族生活の重苦しさに比べては、似もつかぬ清新な世界であつた。籠の小鳥が蒼空に放たれたと云はうか、冬ごもりの兎が春の野に飛び出したと云はうか、公子は心ゆくまでに自由闊達の空氣を吸ひこんだのであつた。わけても宿としたリューダー家の主人の姪ヶ

テイの、清楚な姿と純真な心とは、わが世の春の感じを深く公子の胸に植まつけたのであつた。住む土地は綺麗である。交る學友は愉快である。ケテイとの間はますます親しくなる。かくて美しい夢のやうな愉悅の日が流れて行つた。

そこへ突然國務卿が、故國の大公の病篤しと傳へて來た。公子は、折から病褥中のユットナーを残して急遽歸郷の途についた。大公薨じて、公子は國を繼いだ。

かくして年々は暮れ去つた。しかし公子にとつて夢寐にも忘れ難いのは、ネッカー河畔の愉しかつた現實の相であつた。彼は遂に見えざる糸に曳かるゝやうに、再びハイデルベルヒに訪ね寄つた。けれどもユットナーは客死し、友人は既に四散してゐた。さうして運命は、ケテイとの仲らひにも幸福の手を伸べなかつた。公子は可憐な面影を胸に秘めて、自ら政略結婚の犠牲たるべく決意し、ケテイもまた心ならず従兄の妻となるべき宿命に、嗚咽しながら悲しい哀別を告げたのであつた。アルト・ハイテルベルヒの「思ひ出」はつきないが、人の子の辿

る荆棘の道は辛い。

この五幕の人情劇は、謂はゞ甘いものである。しかし青春の哀愁を湛へ、若き日の感傷を盛りあげた點に、人生途上の一宿驛として永遠の思慕に生くるものであらう。余等がこの都市を訪れたのも、大學が在るためと云ふよりも、古城を見るためと云ふよりも、むしろ昔讀んだこの戯曲、昔觀たこの芝居（文藝協會が「思出」と題して上演）が忘れられないためであつた。

食後、繪はがきを購ふために、他の部屋に入つた時、店のおかみさんは、東海の孤客に告ぐるにケテイのモデルがこの家に居る旨を以てした。遠い昔のロマンスのやうに漫然考へてゐた余は、聞き違ひではないかと思つた。問ひ返したが確かに現存して居ると云ふ。のみならず、何なら紹介しませうと身輕に部屋から出て行つた。さうして直ぐ一人の婆さんを伴れて來た。眞偽は保證の限りではないが、考へて見れば年代に不合理はない。強ちに僞者と却ける理由も持ち合さない。見れば品のいゝ婆さんである。卒都婆小町のお話を想ひながら、一言二

言ことばを交へた。よく分らないけれど、昔語りを問はず語りにすると云ふ人柄でもなく、度しやかな態度に眞實味を思はせるものがある。殘紅もとむるに由なきまで、瑞齒ぐんではゐたが、目鼻立の整つた顔容は、さすがに昔の面影を偲ばせるに十分であつた。グリーンツ描くところの少女を老人にしたら、こんな相貌になるのではなからうかと思つた。

戯曲でも小説でも、モデルは詮議しない方がよいと日

頃から考へてゐる。美しい幻想が、たわいもなく崩れるからである。ゆかしい思出も、浮世の風にあてない事だ。このケテイのモデルには、會はない方がよかつたやうな會つた方がよかつたやうな、妙にちぐはぐの心持を抱きながら、さし出した皺だらけの手を軽く握つて、外へ出た。

ネッカーの川風が、庭先の葡萄の葉を揺りうごかしてゐる。